人類革命

池田大作

人間革命

第十二巻

聖教新聞社

人間革命　第十二巻

一九九三年四月二日　初版

著者　池田大作

発行者　松岡資

発行所　聖教新聞社

〒一六〇　東京都新宿区信濃町一八
電話〇三―三三五三―六一一一（大代表）
振替口座　東京五―七九四〇七

印刷所　明和印刷株式会社

製本所　大口製本印刷株式会社

＊

定価はケースに表示してあります

© 1993 D. Ikeda　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

日本音楽著作権協会（出）許諾第9262153-201号

目

次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

涼風　7
宣言　85
憂愁　148
後継　225
寂光　315
新・黎明　389
あとがき　433

人間革命

第十二巻

装画　東山魁夷

挿画　三芳悌吉

涼風

大自然の力は、限りなく強く、大きい。自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも小さく、はかない。

しかし、人間の心は無限である。その人間の一念というものは、遍く大自然を包み、大宇宙を動かしてゆく不可思議な力用をもっている。

昭和三十二年八月中旬、戸田城聖は、浅間山の鬼押出しの岩肌に立っていた。黒褐色の奇岩がつらなるこの鬼押出しは、天明三年(西暦一七八三年)の浅間山の噴火によって噴き出した溶岩のあとである。

戸田城聖は、この夏、東京の盛夏の暑熱を避けて、軽井沢に滞在していた。

彼は、自身の体調の異変に気づいていた。例年になく、東京の暑さが耐えがたいのであっ

た。体力の衰弱を察知した彼は、八月上旬、夏季講習会を終えると、家族を伴い、軽井沢にやってきた。彼にとっては珍しいことであった。

戸田は軽井沢に来て、数日ほどたったころ、東京へ電話をかけ、山本伸一にこちらに来るように伝えた。彼は、大阪の事件での、伸一の労苦をねぎらってやりたかったのである。

伸一は、戸田の了解を得て、森川一正とともに軽井沢にやってきた。

鬼押出しの荒涼たる景観を見入る戸田の傍らには、伸一と森川がいた。二人は深く息をついて、無言のまま地獄を思わせる奇岩を眺めていた。

浅間山の頂には淡い噴煙が立ちのぼっているのが見えた。その山頂から黒々とした奇怪な溶岩が幾重にも山腹をおおっている。

「自然界における地獄界の痕跡といえるだろう。これを見て、君たちはどう思うかね」

戸田は二人の青年に語りかけた。

「すごいですね」

森川は、こう言ったきり、次の言葉がつづかなかった。

「大自然の猛威を痛感します。私は、噴火のなかで、人びとがなす術もなく逃げ惑う姿を想像しながら、『立正安国論』の御指南を思い起こしておりました」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

伸一が答えた。

「そうか。大自然の不可思議な現象も、仏法に照らしてみれば、すべて明らかになるものだね」

戸田は静かに言うと、奇岩の間を縫うように歩き出した。二人の青年は、彼を両側から支えるようにしてついていった。戸田の足取りは弱く、どことなくおぼつかなかった。あの昔日の堂々とした彼の闊歩を見ることは、すでにできなかった。

空は晴れ、西に傾いた夏の太陽が照りつけていたが、山の中腹だけに大気は涼しく、風はさわやかであった。戸田は、二、三日前にも、ここに来ていたが、伸一たちにも、ぜひこの景観を見せてやりたいと思い、ホテルから車を飛ばしてやってきたのだった。

浅間山の大噴火が起こったのは、天明三年のことであった。

この年、旧暦の四月九日に噴火がはじまり、その後、断続的に爆発を繰り返していたが、七月に入ると噴火は激しさを増し、七日の午後から八日にかけて大爆発を起こしたのである。大音響とともに火口は火煙を噴きあげ、灼熱の火砕流が噴出し、瞬く間に上野吾妻郡の鎌原村(現在の群馬県嬬恋村)をのみこんでいった。

このため、高台に建つ観音堂の五十段の石段のうち、十五段を残して、村ごと土砂に埋もれ、村人四百六十余人が死亡し、生き残った者は、この観音堂に避難していた人など、わずか百人前後に過ぎなかったといわれる。

さらに、火砕流は吾妻川に流れこみ、川をせき止め、やがて、川が氾濫して大洪水を引き起こしていった。火の燃える泥流が煙をあげて流れ、空は黒煙に覆われ、降り注ぐ焼けた石と灰……。累々と横たわる屍のなかを、逃げ惑う人びとの姿は、この世の地獄絵図さながらであったにちがいない。浅間山の噴火による死者は、幕府の正史である『徳川実紀』によれば、およそ二万人とされている。そして、この火砕流につづいて流れ出た溶岩流が固まってできたのが鬼押出しである。

また、降灰は江戸にまで及び、農作物に甚大な被害をもたらした。さらに、噴きあげた火山灰は成層圏にまで達し、太陽の光をさえぎり、異常気象を引き起こし、天明の大飢饉の要因になったといわれる。この大飢饉で、津軽藩では餓死者八万人余、南部藩でも四万人余を出し、津軽、金沢、仙台、信濃などで、相次ぎ一揆や、打ちこわしが起こっている。

しかも、この噴火による異常気象は、北半球全般に及び、ヨーロッパにも凶作をもたらしたのである。そして、それが背景となって、ヨーロッパでは、あのフランス革命が起こって

いる。まさに、浅間山の噴火が、フランス革命の遠因になっているともいえよう。自然界の異変の影響は一国にとどまらず、地球的規模に及ぶのである。

戸田城聖は、近くの岩石の上に腰を下ろした。鬼押出しは、いつしか夏の夕焼けにつつまれていた。夕映えの空にそよぐ涼風が心地よかった。

森川一正が、戸田にたずねた。

「先生、御書には『万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壌を砕かず』と仰せですが、広宣流布の暁には、こうした噴火なども起こらなくなるのでしょうか」

「山も成・住・壊・空という四劫を繰り返しているのだから、その生成過程で噴火を起こすことはなくなりはしないだろう。しかし、たとえ、噴火を起こしたとしても、それによって、民衆が苦しむという事態を、避けることはできるはずだ」

戸田城聖は、浅間山の山頂を仰ぎながら言った。

「この天明三年の浅間山の大噴火は、その後、何年間にもわたって、大飢饉をもたらし、日本国中の人びとを苦しめることになる。じつは、当時、日本には火山の爆発が相次いでい

たのだ。そして、噴火だけでなく、冷害や旱魃、大火も頻発し、人びとは塗炭の苦しみを味わっている。不思議なことには、そのころ、日蓮正宗の歴史のなかで、法難がもっとも集中して起こっているのだよ」

当時の歴史を紐解いてみると、主な噴火だけでも、一七四一年(寛保元年)の北海道の渡島大島、七七年(安永六年)の伊豆大島の三原山、七九年(安永八年)の桜島、八三年(天明三年)の浅間山、そして、九二年(寛政四年)の雲仙岳とつづいている。

一方、法難史をみると、金沢法難は一七二六年(享保十一年)にはじまり、八六年(天明六年)には信徒一人が牢死し、九一年(寛政三年)にも、信徒の中心者が入牢となっている。また、讃岐法難が起こり、日清らが投獄され、牢死したのが一七五七年(宝暦七年)である。さらに、仙台法難が一七六五年(明和二年)に起こり、迫害を受けた覚林日如は、九一年(寛政三年)まで遠島になっている。そして、伊那法難が八四年(天明四年)に惹起している。

つまり、浅間山の噴火に始まり、天明の大飢饉にいたる悲惨な世相を現じた時代は、金沢法難、仙台法難、伊那法難の時と、一致しているのである。まさに、弘法の芽が、無残にも摘みとられていった時代であった。

戸田は、感慨深く頷く伸一に言った。

「浅間山は、天明三年の前にも大噴火を起こしているが、それが弘安四年(西暦一二八一年)なんだよ。

熱原法難で三烈士が処刑されたのが弘安二年だから、まだ法難の余燼がくすぶっていたころだ。この年は蒙古の襲来もあり、鎌倉に大風が吹いたり、悲惨な事態が相次いでいる。大聖人は、これを総罰といわれているが、日本国中が御本仏の仰せに耳を傾けようとせず、迫害したのだから、当然の報いといえるだろう。しかし、こうした現証が起きなければ、謗法に気づかないのだから愚かな話だ。

結局、噴火は、諸天の怒りの表れかもしれない。学会の大弾圧があった昭和十八年には、十二月末に北海道の有珠山の東麓で火山活動がはじまり、それが私の出獄後の二十年九月までつづいた。それで出来たのが昭和新山だ。これは大きな被害はなかったが、牧口先生にとっても、私にとっても、縁の深い北海道で噴火があったことが、不思議でならないのだよ」

浅間の山肌は、薄紫に染まり、山頂から立ちのぼる淡い噴煙は、東になびいていた。

「明日もまた晴れるな」

噴煙の流れを見ながら、戸田がつぶやいた。浅間の山頂に西風が吹き、煙が東に流れれ

ば、翌日は晴れるといわれる。

森川一正がたずねた。

「先生、いま、お話のあった十八世紀のころに、なぜ、法難が集中的に起こっているのでしょうか」

戸田は、森川の質問に笑みを浮かべた。青年の旺盛な探求心を、彼は、常に愛していたからである。

「それは、幕府の宗教政策と深くかかわってくる。徳川幕府がキリスト教を禁止し、宗門改を行い、寺請制度を確立していったことは知っているだろう。ここに法難のひとつの背景がある。当時、キリスト教と並んで、不受不施派など日蓮宗の三派も禁制宗教とされていった。それだけに各藩は、同じ日蓮の流れを汲むものとして、富士門流に対しても、かなり厳しい監視の眼を向けていたようだ。さらに、日蓮宗の諸寺に、自讃毀他の禁令が出され、宗論が禁じられていた。しかし、そのなかでも、折伏が行われ、富士門流に改宗する者が出てきた。他宗にしてみれば、自分の寺の檀家が奪われることになってしまう。そこで、それを阻止しようと、時には讒言をもって権力に訴えたりしたところから、当時の法難の多くが起こっている」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com